



近年、子供の声が「うるさい」として公園が廃止されたり、昨年、地元では近所からの苦情で地域の盆踊りがなくなりました。そこには「静かに暮らしたい」「迷惑を受けたくない」という思いがあると思います。けれども、その思いが強くなると、子供の笑い声や地域の祭りという「いのちの喜び」まで否定されます。子供の声は未来を育む音です。煩悩に覆われると「騒音」としか聞こえませんが、仏の眼から見れば「いのちの響き」です。盆踊りは亡き人を偲び、地域の人々が心を合わせる場です。苦情によって消えてしまうと地域の絆が薄れます。この出来事を通して、私たちは「自分の都合」だけで物事を見てしまう心を知られます。しかし、その心をも包み込む大悲があることを思うとき、子供の声も、盆踊りの太鼓も、すべて「仏の光に照らされた響き」として受け止めて直すことができます。公園の笑い声や盆踊りの音は、私たちの煩悩に遮られて「騒音」と見えます。けれども阿弥陀様の光は絶えず照らし「いのちの喜び」として響いています。その響きを「迷惑」とするのではなく「共に生きる音」として受け止める心を育てていきたいものです。

## ひとくち法話

ほうりんほうじゅ

宝林宝樹

(53)



近年、子供の声が「うるさい」として公園が廃止されたり、昨年、地元では近所からの苦情で地域の盆踊りがなくなりました。そこには「静かに暮らしたい」「迷惑を受けたくない」という思いがあると思います。けれども、その思いが強くなると、子供の笑い声や地域の祭りという「いのちの喜び」まで否定されます。子供の声は未来を育む音です。煩悩に覆われると「騒音」としか聞こえませんが、仏の眼から見れば「いのちの響き」です。盆踊りは亡き人を偲び、地域の人々が心を合わせる場です。苦情によって消えてしまうと地域の絆が薄れます。この出来事を通して、私たちは「自分の都合」だけで物事を見てしまう心を知られます。しかし、その心をも包み込む大悲があることを思うとき、子供の声も、盆踊りの太鼓も、すべて「仏の光に照らされた響き」として受け止めて直すことができます。公園の笑い声や盆踊りの音は、私たちの煩悩に遮られて「騒音」と見えます。けれども阿弥陀様の光は絶えず照らし「いのちの喜び」として響いています。その響きを「迷惑」とするのではなく「共に生きる音」として受け止める心を育てていきたいものです。